
癒物語

トゥルル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

癒物語

【Nコード】

N8273Z

【作者名】

トゥルル

【あらすじ】

暇で書いた化物語の短編です。泥酔の戦場ヶ原と素面の阿良々木が酒の一席でお互いの気持ちを文字通り暴露し合う。泥酔に黒歴史はつきものだ！ 半年以上前に書いたもので、一部原作と異なる点があります。ご了承ください。

結論から言うと、戦場ヶ原ひたぎ、もとい僕のカノジョは大変酔っていた。

勿論、僕の運転するニュービートルの不安定な揺れが彼女の三半規管に極度の刺激を与えたわけではないし、戦場ヶ原特有の自分の発言や行動に酔うという彼女本来の特性とは別で、とすると当然、人が酔う最大の理由であるお酒が絡んでいるのは言うまでもなく、言うまでもない以上、それは正鵠を射ており、僕と戦場ヶ原が挟んでいるテーブルの上には数本の空のビールと空のサワーの缶が無頓着に放置されていた。

もう一度言うが戦場ヶ原ひたぎは酔っている。しかも泥酔だ。泥のように酔っているのだ。そもそも泥酔という言葉の本来の語源は、確か中国の昆虫だったような気がするけれど、そんなものは歯牙にもかけないほどくだらない些細な問題であり、僕にとって、より懸念しなくてはならないのが、戦場ヶ原という女性の本質から判断できるその暴力性と残虐性であり、すなわち僕自身の保身と、この大惨事をどう収束させるかということだ。一応、明言しておくが、僕は完璧な素面であり、ついでに言うついでこの間高校を卒業したばかりだ。そして、戦場ヶ原ひたぎは高校時代からのクラスメイトであり、僕の彼女さんでもあり、未成年だ。未成年の飲酒はこの際、大目に見てもらいたいところだが、戦場ヶ原ひたぎの泥酔っぷりといったら、目も当てられない状況である。

「ちょっと、阿良々木くん、聞いているの？」

戦場ヶ原は狩人のような目つきで、僕を見遣る。

「次は阿良々木くんが裸踊りする番よ」

「次どころか、ずっと僕のターンじゃねえかよ！」

さつきから、戦場ヶ原の無理難題をこなしてきた残念彼氏こと阿良々木暦だが、さすがにこれ以上の暴拳に黙ってられるほど、僕の気は長くない。かれこれ三時間近く振り回された僕の身体は精神的にも肉体的にも限界に近い。

「いい加減にしろよ、ガハラちゃん。家だからって俺達未成年なんだからさ、あんま飲むのは体に毒だぜ？」

戦場ヶ原がこうも暴れまくってられるのは、僕らの所在地が戦場ヶ原の自宅だからだ。どうして、僕と戦場ヶ原が戦場ヶ原の自宅ですら飲みあうことにはなったのかは、物語の都合上省いておく。まあ都合上というよりも語るまでもないことだし。

「あら、こよみん。私は全然飲んでなんかいないわよ。大体、私の身体のアノマシンが体内に取り込まれたアルコールを次々と分解してくれているんだから、平気よ」

「お前は、どこのフォックスハウンドだ！」

「いけないっ。透析をしないと、牛乳を吐いてしまうわ！」

「あれ血だから！ コメディみたいだけど本人文字通り必死だから！」

「というか、こよみんて。そんなあだ名で呼ばれたの生まれて始めてだぞ。」

僕のキレを失った突っ込みをガハラさんは無情にもスルーし、飲みかけの缶ビールを男らしく豪快に呷る。

「おいおい、大丈夫かよ、ガハラさん。ちょっと飲み過ぎじゃないか」

目は据わっているし、顔は真っ赤だし。けっこう怖いんだけど。

「は？ 何を言っているのかしら、この阿良々木暦なる矮小生物はまったく、どこをどう見たら、この私が酔っていると判断を下せるのかしら。だからこよみんはいつまでたってもこよみなんですう！」

「未だ、かつてない毒舌の吐き方だな、おい！」

「ところで、阿良々木くんが四人に見えるのだけど。これは一体どういう魔法？ 童貞分身の術？」

「そんな惨めな忍術があるか！ つーか、バリバリ酔ってんじゃん！」

視点をぐるぐるさせる戦場ヶ原。きつとこれがアニメ化されれば、戦場ヶ原の眼は渦を巻いていることだろう。

「いい、こよみん？ お酒は飲んでも飲まれるなという言葉があります」

ガハラさんの口調が知識を享受しようとするお姉さん調になる。変に逆らうと僕の右腕が粗大ごみになってしまうので、従順に頷く。

「けど、私は思っのよ。お酒は飲料であって、人を呑み込む化け物ではないわ」

「そんなの皆知ってるわ！ つーか、酒に飲まれてる人が言っても説得力ないし！」

「お酒が人を飲むんじゃないの、人がお酒を飲むのよ」

「なんかかつこよく言ってるけど、普通の言葉だ！」

「安西先生、お酒が飲みたいです……」

「どこの酔いどれサラリーマンだ！ いくら安西先生といえど再起

不可能だろ！」

「それより、こよみん」

完全に酔っ払ったガハラさんの矛先はもうめっちゃめっちゃだ。僕も突っ込みすぎて声が枯れそうだ。

「なぜ、こうも私がお酒を呷っているというのに、こよみんは一滴もアルコールを摂取していないのかしら？」

ギロリとガハラさんの目つきが尖る。かなり怖い。

「だ、だって僕今日車だぜ？ 酒飲んだら帰れなくなるし」

「素直に帰りたくないのっていいなさいよ」

「僕の言葉をどう解釈したら、そうなるんだよ！」

「ええ！？ こんないたいけな女子大生をべろんべろんに酔わせて、それでもなおこよみんは正気を保っていられるというの！？」

「なんで、僕が酔わせたことになってんだよ！ 第一、彼女を無理やり酔わせて、そういう行為をしようとする奴なんて男として最低だろ」

そんなことしたら、男の品格が疑われてしまう。常に紳士の心を忘れないのが僕の流儀だ。

「じゃあ、こよみん、聞きますけど。もし羽川師匠がべろんべろんに酔ってて、とっても無防備な姿でこうとろんとしてたらどうするのよ？」

「お前、そりやまず介抱するふりをして胸を触るだろ。ベッドに寝かすふりで揉みまくるに決まってんじゃない。じゃないと羽川の胸に失礼だろうが」

「そんな無垢な瞳で強く訴えることじゃないわね」

羽川の胸を見つけたら、まず揉めというのが阿良々木家の家訓（主に僕にのみ適用）なのだ。また八九寺を見かけたら、背後から抱きつくというのも阿良々木家の（以下略）。

「まったく仕方ないわね、こよみんは。そんなにこの家に泊まりたいのなら、それ相応のお願いの仕方があるでしょうに」

「だから僕は泊まるつもりなんかないって。ちなみに、どういうお願いの仕方なら許されるんだ？」

「私のお父さんに電話で頼んで頂戴」

「ハードルたけえ！」

彼女の父親にお泊りの認可を問うなんて、今の僕には、というか地球上の全彼氏には厳しい過ぎる門だろ。けれどガハラさん家にお泊りなんて、心臓がタップダンスするほど心踊るイベントであるし、鼓動が三オクターブほど高鳴る。ぶっちゃけると、今のところんのかハラさんがもう可愛すぎて、僕的にはかなりやばいところまで来ているのだけど、きつとここ自重しなくてはならないタイミングだろうし、健全な大学生を自称する阿良々木暦としては条例で保護されているとはいえ、公私を乱す行為は流石にいただけない。大体、これがアニメ化したら、R指定を食らっちゃうだろうが。僕は構わないけれど、そこそ偉い人が黙っちゃいないだろう。というわけで僕は負けないぞ。誘惑には負けない！

僕は雑念を振り払い

「真面目に答えるとき。たぶん僕ってかなり酒に弱いだろうし、ここで飲んだら泊まるどころか、僕の人生において取り返しのつかない大失敗に繋がっちゃうような気がするんだよな。それに明日も無限の講義あるんだし。ほどほどにしないと」

言い訳としては、なかなか厳しいラインだけれど、とりあえず事実である。一限の授業は時間に厳しい先生で、遅刻なんかもつてのほかだし、開始五分前に着席していないと、出席さえとってもらえない。

「だからさ、こちら辺でお開きにしようぜ。今度は休みの日にさ、僕の家でパーっとやろう。そしたら僕も浴びるほど飲むからさ」

彼女の実家でしかも親がいぬ間に泥酔なんて、男としての価値が疑われる。それに戦場ヶ原も今日は飲みすぎているんだ。なんでこんなに自棄酒みたいになっているかは定かではないが、きつと素面に戻ったときに今日の醜態を酷く後悔するに違いない。なら彼女の黒歴史が完成してしまう前に体裁を整えてやるのが彼氏の務めだろう。

「ねえ、阿良々木くん」

「うん？」

「今なら、阿良々木くんが私を襲っても、抵抗しないわよ」

ぶは！

なにこれ！

貞操観念に定評のあるガハラさんはいずこへ！？

「そ、それはお前が酔ってるだけだろ。やめとけよ、そういうのはさ。よくわかんないけど、女の子の初めてって結構大切なんだろ。僕も不本意だしさ」

「じゃあ阿良々木くんは、私の事が嫌いなのか？」

「はあ？ 何言ってるんだ？」

いきなりの虚をつく言葉に僕は疑問符を頭上に浮かべる。なんだ、

ガハラさん流の揺さぶり攻撃か。しかし、いつの間にか俯くガハラさんにはいつもの刺々しさが無い。

「だって、私はこの世の定規では測りくれないくらい阿良々木くん
のことが好きなのよ。阿良々木くんは私の玩具で、ペットで、男で
—— 大切な人なの。けど阿良々木くんって意外と素っ気無いじ
ゃない」

「そ、そんなことないだろ」

特に玩具でペットで、ってところが。

「いいえ、そうよ。真宵ちゃんにはべたべた抱きつくし、羽川師匠
の胸は揉みまくるし、神原のスパッツを舐めまくるし、千石ちゃん
には羞恥プレイを強要するし、忍ちゃんの肩甲骨を撫で回すし、火
憐ちゃんと月火ちゃんと一緒に風呂に入るし」

「とんだ変体野郎だな、僕って」

「けど、私には何もしてくれない」

「キ、キスしたろ」

「それだけじゃ足りないわよ!」

バンと机を叩く戦場ヶ原。その拍子にビールの空き缶が数本倒れ
る。

「私だって、阿良々木くんにべたべた抱きつかれたいし、胸を揉み
まくりたいし、スパッツを舐められたいし、羞恥プレイを強要され
たいし、肩甲骨を撫で回してもらいたいし、一緒にお風呂に入りた
いわ」

「僕もそうだけど、お前も大概変態だな」

「彼女に冷たいのよ、阿良々木くんは」

ぼくの突っ込みを無視して、切実そうに戦場ヶ原は言う。

「私は阿良々木くんに捨てられたら、間違いなく死ぬわ。半径40キ口範囲の人間を巻き込んで死ぬ」

「でっかい爆弾だな」

「恋愛は爆弾なのよ」

どこかの芸術家のような言葉で戦場ヶ原は呟く。

「恋という気持ちは短い時間でどんどん膨らんでいつて大きくなっていくのよ。気持ちに比例して、欲望も大きくなって、しまいには爆発して、急速に気持ちは萎んでいくの。ただ私のこの気持ちはC4クラスよ。爆発の規模も発火時間も他の女とは比べ物にならないわ」

「うん。それは僕が一番よく知ってるよ」

戦場ヶ原がそういう女なのは一年前から知っている。その気持ちの大きさも。

「正直私は阿良々木くに嫌われるのが、この世で一番恐ろしいわ。蟹に逢って重さを奪われるより、蛇に咬み殺されるより、よっぽど恐ろしい。恋が冷めてしまつて、阿良々木くと離れて他人同士になつてしまうのは死んでも嫌よ」

それだけど、と戦場ヶ原は続ける。

「阿良々木くんは私と違う。私が阿良々木くんを嫌いになつたりすることは永遠にないでしょうけれど、阿良々木くんが私を嫌いになることはあるかもしれない。無論、阿良々木くに好かれ続ける自信はあるけれど」

いや、自信あるのかよ。自身過剰過ぎる。むしろ自信過剰というより自信異常といったほうがいいかもしれない。

「けど、私は神ではないし阿良々木くんの気持ちを一生コントロールするのは流石に無理。だから私は精一杯阿良々木くんに嫌われないうようにするしかないわ。だから、扇情的に煽って少しでも既成事実をつくろうとしたのよ」

「おま、最後の最後でその発言はないだろ！」

こういう時の戦場ヶ原の言葉は冗談でもなんでもなく、ただの本音なのだから、本当に困る。しかも当のガハラさんがこれまた悶絶するほど可愛いなのだから、なおさらたちが悪い。

「阿良々木くんを誑かすような女がいたら真っ先にそいつを殺すし、阿良々木くんが好意を寄せる女も殺す。その後、阿良々木くんも殺します。けどね、阿良々木くんが単純に私を嫌いになってしまったら、私は私を殺してしまうわ」

「……………」

これも冗談なんかじゃないだろう。こういう事に関してジョークを言う女じゃないんだ、戦場ヶ原ひたぎというやつは。

「だから、阿良々木くんが私を嫌いにならないよう手を打ちたかったのよ。言っとくけど、私、阿良々木くんを満足させてあげる自信もあるのよ」

本当にこいつは自分に対して謙遜や譲るという気持ちがないんだな。それも戦場ヶ原のいいところではあるけれど。

「まあガハラさんの気持ちも今日の自棄酒気味なペースも僕にはよ
うやく得心がいったから、言わせてもらっけどなあ」

僕は戦場ヶ原に向き合い

「僕の気持ちは一年前、お前に告られた時からほとんど変わっちゃ
いねえよ。むしろより凶悪になってるぞ、間違いなく。僕だって戦
場ヶ原が好きで好きで堪らないんだよ」

僕の人生でこれほど愛おしく思ったのは戦場ヶ原ひたぎ、ただ一
人だ。これまで面と向かって言った事はないけれど、僕は戦場ヶ原
ひたぎが大好きだ。もう愛しまくってる。

「僕ってほら、根は暗澹たる性格してるからさ、それにこういう付
き合いも初めてだし、ちよっとまだよくわかんねえんだよな。でも
よ、ガハラさんが大好きなのは絶対で嘘じゃない」

「じゃあ、どれくらい私の事が好きなのよ？」

うーん。これって、ありがちだけど難しい質問者だよなあ。男の
器量が試されてるって感じ。ちよっと週巡して。

「毎日、ベッドで寝る時も枕をガハラさんのつもりで抱きしめちゃ
うぐらい好きだ」

ん、あれ、これって答えとして適切なのかな。

「私だって、毎朝、阿良々木くんに貰った人形におはよつのキスを
してるわよ」

「なら僕だって、毎朝、ガハラさんと撮った写メに朝の挨拶をして
るぜ」

「私なんか、毎日下着を選ぶ時に阿良々木くんならどういう感想を言うか、妄想しながら着替えてるのよ」

「僕なんか、火憐ちゃんと月火ちゃんに家ではガハラさんのことはお義姉ちゃんと呼ぶように躑躑してるんだぞ」

「私のノートにはね、実は阿良々木ひたぎって書いてあるのよ」

「僕のノートにや、子供の名前まで書いてあるぜ？」

「この間、神原とウエディングドレスの試着に行ったんだから」

「へん、僕なんか八九寺と披露宴の練習したぜ」

「実はもうお父さんの許可はもらっているのよ」

「僕の両親はなって、そりゃ反則だろおおお」

お父さんて。僕も何だかテンションが上がってしまったから、色々つぶっちゃけてしまったが、話が飛びすぎていて、もう何がなんだかわからないーーーー！

「と、とにかく、僕が戦場ヶ原が嫌いになることは一生ないと思うぜ。僕って意外としつこいんだよ。それに僕からしてみれば、ガハラさんに嫌われちゃうほうがよっぽど怖いよ」

「安心しなさい、阿良々木くん。私は阿良々木くんが将来、ミンチになってしまう運命でも愛し続ける自信がある」

「なんだよ、その運命！」

僕はハンバーグが何かになる運命なのか。

「なら阿良々木くんがそこまで言うなら、これはお願いじゃなく、命令よ」

戦場ヶ原はびしっと人差し指を僕に指すと

「阿良々木くんは私のことを愛し続けなさい。永遠に。私が死んで

屍になっても、阿良々木くんが骨になつて土に還つても、永遠に、永遠に愛し続けなさい。いい？ 絶対の命令よ」

「……わかつたよ」

あくまでこいつらしいセリフで、締めくくる戦場ヶ原。

ああ、やっぱり変わんねえな。高校卒業しても、戦場ヶ原は変わらない。ツンドラ時代もツンドロ時代も、今も。強気で強情で唯我独尊で。支配欲、独占欲の塊で。僕の知る戦場ヶ原ひたぎは変わらない。

「ところで、阿良々木くん。さつきから続けているその股間を弄る仕草、そろそろやめてもらえないかしら。ただでさえ、気持ち悪い阿良々木くんがそんな行為したら、気持ち悪いの二乗で、国民不栄誉賞ものよ」

「やっぱり、全然変わつてねー！」

そんな毒舌も。そんな言葉も。そんな仕草も。

化物も傷物も偽物も猫も傾も花も囃も鬼も恋も。

全部、ありのまま、変わらない、物語。

戦場ヶ原も羽川も神原も八九寺も千石も火憐も月火も忍も扇も。

全員が全員、全員の物語。

これはきつと変わらない恋の物語。

変わらない、化けない、ただの物語。

きつと、そんな物語。

（後書き）

いやいや、戦場ヶ原酒飲むのかよつてのが書いてる作者も一番謎でした。まあそこら辺は私の想像ならぬ妄想なわけですが。実は本当は色々改編しなきゃいけないところがあるんですが、物語シリーズを既読の方は気づくと思いますけど、もうそれ以前に原作ブレイク状態なので気にしない方向にしました。

当初は羽川、神原、八九寺、千石全員を登場させる予定でしたが、それだと文字数が四万を超えるだろうとのことで諦めました。あくまで短編で投稿したかったんです。

そんなわけで、作者の予想とはだいぶ逸れた物語になりましたが、楽しんでもらえれば幸いです。
それでは。

暦の影の中にはちゃんと忍があるんやで（裏設定）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8273z/>

癒物語

2011年12月26日07時50分発行